

## 平成 28 年度「日本音楽学会国際研究奨励金」受領報告書

林萌子

### 【発表学会について】

学会名称：IMS (International Musicological Society) Conference 2016 in Stavanger

Music as Art, Artefact and Fact – Music Research in the 21st Century –

開催日程：2016 年 7 月 1 – 6 日

開催場所：University of Stavanger, Norway

2016 年国際音楽学会 (IMS) は、ノルウェーの南西端に位置する長閑な港町スタヴァンゲルで開催され、市街地から海沿いに 10 分ほど歩いた高台にあるスタヴァンゲル大学では、7 月 1 日から 6 日間、世界各地から集まった研究者により熱い議論が交わされた。

学会は、「Music as Art, Artefact and Fact – Music Research in the 21st Century –」というテーマに沿って、3 つの基調講演、8 つのパネルディスカッション、60 の研究発表から構成されていた。Lydia Goehr 教授、Xavier Serra 教授、そして Philip. V. Bohlman 教授による基調講演は、学会テーマの理解を深める大きな手助けになっただけでなく、まさに 21 世紀の音楽研究の核心をつく刺激的なものであった。パネルディスカッションでは、初日の‘Shostakovich Study Group: Public and Private Lives: Memory, Friendship and the State’が、自身の発表に大きな影響を与えた他、現在主に音楽大学などでその真価が問われている Artistic Research に関するラウンドテーブルでの白熱した議論も印象的だった。また、‘ROOMS SHAPE MUSIC; MUSIC SHAPES ROOM. Art, Artefacts and Facts in the Concert Hall’と題された音響設計についての発表は、2012 年に新設されたスタヴァンゲルコンサートホールで実演を伴って行われ、こちらも参加者同士が自国のホールについて話し合う良い機会となった。

研究発表は、Cultural Studies, Music Performance, Music Analysis, Music History, Music Philosophy, Empirical Musicology, Music and Gender, Ethnomusicology, Artistic Research のそれぞれのセッションに分かれ、3 つの会場で同時に進行された。研究テーマは多岐に亘り、研究者の年齢や国籍も挙げだせばきりが無いが、主にヨーロッパ及びアメリカで研究に従事している参加者が多かったように見受けられる。その中でも、Kyle Devine の音楽にまつわる資源の持続性に関する発表 (‘Bugs, Rocks, Oil, and Light: Political Ecology and Recordings as Cultural Artifacts’)、Orit Hilewicz の絵画と音楽に関する発表 (‘Musicalizing the Twittering Machine: Multitextual Listening in Analysis’)、Floris Schuiling の即興演奏に関する発表 (‘Music notation as technology and material culture in the performances of the ICP Orchestra’)、Tami Gadir の音楽とジェンダーに関する発表 (‘The Gendered Turntable: woman DJs and their machines’) は、その視点とアプローチが非常に斬新で、今後の自身の研究を考える上でとても興味深

いものであった。

また、大学に隣接する前述のスタヴァンゲルコンサートホールでは、ランチコンサート及びイブニングコンサートが連日行われた。その中でも、ノルウェーの作曲家、ヨハン・ハルヴォルセン Johan Halvorsen (1864–1935) によるヴァイオリン協奏曲は、初演の1909年以降失われていた楽譜がトロント大学の音楽図書館で2015年に発見され、この学会に合わせて再演、校訂版が出版されたという点で、意義深いものであった。演奏会の前にはトロント大学の司書陣、コンサートのソリスト、指揮者、校訂版の編集者がパネルディスカッション形式で議論を交わし、その熱気そのままに、演奏会場は大いに盛り上がった。

### 【研究発表について】

セッション名：Music History

日時：2016年7月3日10時から

タイトル：The Parallel between Beethoven and ‘Japan’s Beethoven’

#### (要旨)

作曲家に関する音楽評伝 (Music Biography) は、単なる作曲家のライフストーリー、またその作品に付随するものとしてだけでなく、作曲家とその音楽の受容、音楽史及び音楽自体の理解に大きな影響を及ぼすものとなっている。かつて「日本のベートーベン」と評された日本人作曲家・佐村河内守が詐欺師として摘発された2014年のニュースは、ロマン化され、文化的に構築された評伝に基づく音楽史の本質と危険性を明らかにするものであったと言える。作り上げられた「ヒーロー」は、代作された代表作、捏造されたプロフィール、そして偽りの聲で社会を欺いた。しかしこの事件は、その社会的関心の高さにも関わらず、またそれが音楽史を形成してきた音楽評伝の裏にある問題を炙り出すものであるにも関わらず、音楽歴史的な視点からの学術的研究はほとんどなされていない。

これらを踏まえ本発表では、音楽作品への伝記的アプローチに潜在する問題と佐村河内の事例の本質を明らかにするため、音楽学的、社会学的ディスコースを視野に入れながら、作曲家・佐村河内を、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーベンの確立された作曲家像と比較した。手法としては、まず既存のベートーベンの研究を俯瞰し、創造上の「天才」、苦難を乗り越える精神的な「ヒーロー」という信念体系が構築された過程を考察した。音楽評伝に関しては、Hans Lenneberg の概説的な著述をもとに、グローヴ音楽事典、Dent Master Musicians シリーズなどで作曲家がどのように扱われているのかを検証し、また、ベートーベン研究に関しては、19世紀初期のE.T.A. Hoffmanに始まり、20世紀後半のTia DeNoraやScott Burnhamに至るまでの作曲家研究を参照し、分析した。

次に、佐村河内のスキャンダルを概説し、ベートーベンと「現代の日本のベートーベン」を、公のイメージ (Public image)、音楽のコンセプト (Conception of music)、市場性

(Marketability)、時間と場所 (Time and Place) という 4 つの観点において比較した。イメージについては、ベートーベンと佐村河内の外見とそこから構築されたイメージを比較、音楽のコンセプトについては佐村河内の交響曲第 1 番「Hiroshima」において「付加された意味」とベートーベンの交響曲第 5 番「運命」を比較、市場性については、プロデューサーとしての佐村河内とベートーベンの比較、時間と場所については、佐村河内が受容された現代と日本という場について考察した。

これらの議論を踏まえ、音楽の一般的な受容においては、音楽評伝として知られる「物語」が音楽の理解と解釈までも規定するものとなっており、佐村河内の事件はそのようなアプローチの危険性を描き出すものであると結論づけた。

#### (質疑と反響)

発表時間内の質疑応答では、「事件のその後はどうなっているのか」「事件以来 Hiroshima はどのように評価されているのか」「現在 Hiroshima の作曲家の表記はどうなっているのか」など、この事件自体についての具体的な質問が多くなされたが、「現代音楽における作曲家とは何か、そこからこの事件をどう考えるか」など、答えに窮する質問も飛んだ。

発表後には、ショスタコーヴィチに関するパネルの発表者であった Marina Frolova-Walker 教授と Stefan Weiss 氏、発表者と同セッションで発表した Merle Fahrholz 氏、オスロ大学の Arnulf Mattes 氏から意見を伺い、音楽評伝の問題、ロシア、ドイツ、ノルウェー、日本における現在の作曲家像について議論を交わした。国によって、音楽史の語られ方と社会における芸術音楽の価値が、そしてそれに伴う作曲家像が違い、非常に興味深かった。また、台湾の Jen-yen Chen 教授はアジアにおける西洋音楽という観点で関心を寄せてくださり、これもまた研究の余地が多く残される分野だと実感した。

この濃厚な 6 日間を通じ、参加者の背景や研究テーマが全く違いながらも、多くの参加者が自身の領域外のことに興味を持ち、世代や立場など関係なく議論を交わせる IMS の魅力を実感した。2017 年には IMS 2017 Tokyo Congress が日本で開催される。この世界大会への期待は非常に高く、発表者が日本人ということもあり、スタヴァンゲルでの学会中も多くの参加者にこの大会について尋ねられた。自身も IMS Tokyo でのさらなる刺激的な日々を今から楽しみにしている。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった住友生命保険相互会社様ならびに日本音楽学会に心からの感謝を申し上げたい。